

盲目の公爵令嬢に
転生しました 2

波湖真

Makoto Namiko



RB

レジーナ文庫



登場人物紹介

スティーブン

アリシアの父。アリシアのことは
目に入れても痛くないくらい溺愛している。



ミハイル

カイルの学校の友人。
男爵家の息子で
金勘定に厳しい。

マクスター先生

魔法学校の教師。
重度の魔法オタク。



ケイト

アリシアの侍女。
幼い頃からアリシアの
面倒を見ていて、
彼女のよき理解者。

エリック

カイルの学校の友人。
騎士団長の息子で
やや脳筋。
剣と魔法の腕は一流。

アラミック

カイルの学校の友人。
隣国からの留学生。
人当たりが良く柔軟な性格。

カーライル

カイルの学校の友人。
公爵家の嫡男で、アリシアの従兄。
軟派な外見に反して、性格は真面目。
カイルにも一目置かれている。

エミリア

カイルの学校の友人。
新進気鋭の男爵家の令嬢。
発明家の顔も持っていて、
一部の学生や市民から
猛烈な支持を得ている。



カイル

アリシアの婚約者で第五王子。
アリシアのことを溺愛している。
やや腹黒く策士な一面もあるが、
優しく友達思い。

アリシア

前世の記憶を持つ、盲目の公爵令嬢。
明るくて超前向き。
魔法を使えるようになるため
猛特訓中。



目次

盲目の公爵令嬢に転生しました 2

書き下ろし番外編

光の世界と変わらない私

盲目の公爵令嬢に転生しました
2

プロローグ

「アリシアお嬢様、お時間です」

私は、幼い頃から世話をしてくれている侍女のケイトの声で目を覚ました。

目覚めるといっても私は生まれつき盲目で、目は全く見えない。だから今が朝かどうかともケイトに言われなければわからない。

「ありがとう、ケイト」

私はケイトに声をかけると、勢いよく上半身を起こす。

私の名前はアリシア・ホースタイン。この世界では公爵令嬢だ。

不思議ではあるが、生まれた時から前世の記憶が備わっている。

前世では、日本に住む十八歳の女の子だった。残念なことに、酷い喘息で人生の大部分をベッドの上で過ごし、若くして死んでしまった。

でも、今際の際で私は願った！ 絶対に生まれ変わってやると！

そして、見事に転生を果たして今がある。

但し、転生先のアリシアは生まれながらに目が見えず、あたふたしたのは言うまでもない。

そんな想定外なことから始まった第二の人生だったが、生まれ落ちたこの世界は、私にとって素晴らしいものだった。

私を溺愛する優しい両親に恵まれ、仲の良い幼馴染かつ、この国の第五王子カイルとは十歳の時に婚約した。

私はカイルのことが大好きだし、カイルも同じように思ってくれている。

更にこの世界には魔法があった。残念ながら目が見えない私は上手く使えないが、確かに魔法は存在する。

それだけでも私はワクワクが止まらなかった。

そんな幸せな人生に不穏な出来事が起こり始めたのは、十六歳の時だった。

カイルが通っていた学校を訪れた際、何者かに襲われたのだ。幸い怪我はなかったが、目の見えない私には犯人がわからなかった。

そんな中、カイルの側近候補だったエミリア・フレトケヒト男爵令嬢と出会った。

初めは仲良くしてくれたが、次第に私への嫌がらせが始まり、変な噂を流すように

なった。

信じられなかったし、信じたくなかったのだが、日に日にエスカレートしていくエミリアさんの行動に疑問を感じた私は、カイルと協力して彼女を調査した。

その結果、エミリアさんは私をターゲットに、なにかを企んでいるらしい。

更に私は、エミリアさんが私と同じ転生者ではないか？ ということにも気が付いてしまったのだ。

私はカイルに、自分が前世の記憶がある転生者で、エミリアさんも同じではないかと打ち明けることにした。

カイルが信じてくれるのか不安だったが、彼は私を信じてくれて、共にエミリアさんの企みを暴いていくことを約束してくれた。

それだけで、私の心は軽くなった。

その後のカイルとの……キスを思い出して、私は思わず頬に手を当てた。

「アリシアお嬢様、お支度の準備が整いました」

「あつ、え、ええ、わかったわ」

ケイトの声で現実に戻った私は、慌ててベッドから起き上がったのだった。

第一章 アリシアと魔法

・・◆公爵とアリシア◆・・

ある日の昼下がり、私とカイルはガゼボで通信機という、前世でいうところの携帯電話のような魔道具を使って、パパさんことホースタイン公爵と連絡を取っていた。

数秒呼び出すと、すぐに聞き慣れた声が響く。

「アリシアかい!？」

パパさんは今、王宮の執務室にいるはずだ。

相変わらず慌てたように話すパパさんの声を聞いて、私は頬を緩める。

パパさんは私を溺愛するあまり、いつも過剰に心配ばかりしているのだ。

「はい、お父様。アリシアです」

しばらく沈黙が続いた。

「お父様？ 聞こえています？ お父様？」

「ああ、ごめんよ。アリシア。お父様はここにいるよ。相変わらず可愛い声で、お父様は感動してしまったよ」

「お父様ったら！ お元気でしたか？」

「もちろん元気だよ！ 元気がなくても、アリシアの声を聞けば元気になる」

「まあ、ふふふ」

私とパパさんのやり取りに痺れを切らしたのか、隣に座っていたカイルが私の肩を少し引いて話し出した。

「公爵、お久しぶりです。カイルです」

カイルの声を聞いて、パパさんの声が少し低くなる。

「これはこれはカイル殿下、ご無沙汰しております。今日は一体何事ですか？ ハッ！

もしや、またアリシアの身になにかあったんじゃない！」

「お父様！ 違いますわ。安心なさって？ 今日、あの件のご報告とご相談がありますの。お時間を頂いてよろしいですか？」

「ああ、わかったよ。三十分くらいなら大丈夫だよ」

私はパパさんに、マチルダさんとエリックさんが報告してきたことについて話した。

エリックさんはカイルの側近候補で、学校ではカイルと同じ執行部のメンバーに選ば

れている。エリックさんは騎士団長の息子で、伯爵家の三男でもあり、私の友達のマチルダさんとは婚約者同士だ。マチルダさんは騎士団の副団長の娘で、男爵令嬢だ。

この二人にはエミリアさんの調査で色々助けてもらっていた。

「なるほど、それじゃあエミリア嬢自身が、王都でカイル殿下と自分が仲良くしているという噂と、学校におけるアリシアの悪評の両方を流したということかい？」

「はい。ただ、状況証拠ばかりで物証はございませんの。それに、私はエミリアさんに嫌われてしまったようです。折角仲良くしてくれたのに……とても残念ですわ」

エミリアさんとのやり取りを思い出すと心が重くなる。

「アリシア……可哀想に。大丈夫かい？」

「はい、ただ、なぜそんなに私を嫌うのかわかりません。なにかをしようとしているようなんですが……」

実を言うと、エミリアさんが同じ転生者だから、私を敵視しているのではと考えている。しかし、カイルと相談した結果、私の前世や転生については、まだ両親に話さないことにしたのだ。なんと言っても信じられない話なので、余計な心配をかけたくなかった。私の話を聞き終わると、パパさんは納得したように答える。

「なるほどね。でも、お父様は安心したよ。この前カイル殿下にあの男爵令嬢について

相談したとは聞いていたけれど、アリシアが未だに一人でどうにかしようと思ってるんじゃないかって心配でね。やはり限界はある。それはそうと、危ないことはしていないだろうね？」

「……はい。もちろんですわ」

パパさんの心配そうな声に、私は少し考えてから答えた。

怪我^{けが}もしていないし、襲われてもいないもの。危ないことはしていないわよね。

すると、パパさんは「しょうがないね」と苦笑して、パンツと手を鳴らした。

「よし！ では、これからお父様の報告を始めようかな？」

「え？」

「え？ じゃないだろう？ アリシアが襲われたのに、お父様がなにもせずにいるとうして思ったんだい？ この前の話から、フレトケヒト男爵家について調べてみたんだ」まだ完璧ではないがと断ってから、パパさんは今現在わかっている男爵家の動きや疑惑について話してくれた。

フレトケヒト男爵家の成り立ちから最近の成功までをまとめ、その中でも『発明』が世に出てからの動きについて詳しく調査していた。

「というわけで、今や知らない者はないと言っても過言ではないという発明が、フレト

ケヒト男爵家から生まれ続けているんだ。トランプくらいなら可愛いものだったんだが、やはり通信機を発明したことで貴族内での立場が変わったな。野心のある上級貴族がこぞつてフレトケヒト男爵を厚遇^{こうぐ}し始めたんだ」

「お父様、それはなぜですか？」

「もちろん、資金が大きいよ。身分は高くとも資金繰りが苦しい貴族は沢山いるからね。今やフレトケヒト男爵はこの国でもかなり上位の資産家だよ」

「……そうなんですわ」

「でも、それだけじゃない。今アリシアから聞いた話で、疑念が確信に変わったよ」

パパさんは硬い声で言った。不思議に思った私は、小首を傾げて尋ねる。

「なにがですか？」

「情報だよ。フレトケヒト男爵家には情報が集まる。そう言われているから更に人が集まり、そしてまた情報が集まる。まるで学校でのエミリア嬢のようだよ。もしかすると、彼女は発明だけではなく、男爵家の運営にも深く関わっているのかもしれない。だって商人達があがめるほどなんだろう？ それは即ち^{すなわ}エミリア嬢の側にいれば儲^{もう}かるということさ。確かになにかを企^{たくら}んでいても不思議じゃないな」

パパさんの話を聞きながら、話がドンドン大きくなっていくことに焦りを感じる。

そうなのだ。それ程この世界における『発明』は人々に影響を与えてしまう。確かにエミリアさんは、この世界でなにかをしようとしているけど、それはこの国を変えるような大きなことなのかしら？

「お父様、ちょっとお待ちになって！」

私は、話を続けようとするパパさんを思わず止めた。

「どうしたんだい？ アリシア」

もし私が、エミリアさんの立場だったら、前世の便利なものをこの世界に広めたいとは思っただろう。

でも、今までのエミリアさんの言動を考えると、彼女の行動理念はもっと単純な気がする。

興味本位であつたり、自分の好き嫌いであつたり、ただただ自慢しくて知識を披露しているように思える。

前世でもっと、もっと、危険で物騒ぶつそうなものが沢山あるのだ。それこそ、銃じゅうなんて可愛いと思えるようなものがいくつも思い浮かぶ。

「お父様、フレトケヒト男爵はわかりませんが、エミリアさんに関してはもっと単純な目的があるんじゃないかと思えますの」

「それはどうしてだい？」

私はパパさんに、エミリア・フレトケヒトという人の印象を説明する。

「例えば、お父様が仰おほる通り、エミリアさんが洗脳やお金で人々を取り込んでいると考えると、今この学校にいる必要はありませんわ。こんな小さな世界どころか、この国の根幹に影響を与えられるんですもの。それなのにエミリアさんはまだ学校にいます。それはこの学校の中でしか成しええなにかがあるからだと思えますの。それは恋愛であつたり、嫉妬しとであつたり、もっと自分本位なもの……」

その時、ずっと黙っていたカイルがおもむろに口を開いた。

「公爵、今の話を聞いて、そして、実際にエミリアと友人として接していて感じたことを言わせていただきます。まず、第一にエミリアは実家を快く思っていないませんでした。なので、エミリアが男爵家を利用するというより、男爵が彼女に固執しているという方がしっくりきます。実家からしつこく連絡が来ると嫌そうにあらうっていましたし。第二にアリシアも言っていました、彼女は国を変えるとか、家がどうか、志こころざしを持つて行動するというより、もっと目先の欲求に忠実なタイプです」

カイルが話し終わると、暫しばし沈黙が訪れる。

「なるほど。君達はエミリア嬢の目的は未だ学校の範囲内にあると考えているというこ

「とかな？」

「はこ」

パパさんがゆつくりと確認する。その言葉に私とカイルは手をキュツと握り合^{にぎ}って頷いた。

「わかったよ。では、エミリア嬢については二人に任せる。ただ、今のところ彼女と男爵家は目的を共にしていないかもしれないが、今後はわからない。早めの対処が必要だよ？」

パパさんは冷静に状況を分析して助言してくれる。すると、今度はカイルが少し考えながら話し出す。

「公爵……。僕に策があるのですが、聞いてもらえますか？」

「なんですか。カイル殿下」

「僕が考えている策は、一度エミリアの思惑に乗ってみるということです。王都の噂やアリシアへの襲撃、その後の嫌がらせの数々……そこから得られる結果は、僕とアリシアの不仲、もしくはアリシアの失脚にあると思います。それならば、僕達が不仲だと思わせることで、エミリアが次の一手を打つ可能性が高まる。今のままでは、残念ながらエミリアがいつ動くかわかりません。もしこの策が上手くいけば、こちらの罠^{わな}に嵌^はめる

ことも、先手を打つことも可能です」

私はカイルの言葉に驚き、息を呑んだ。

「なるほど、後手後手になっている現状を変えるということですね」

「はい。そのためには僕からアリシアに婚約破棄、もしくはそれを匂わすようなことをする必要があります。本当に不本意ですが、それが確実だと思います。それをエミリアが信じてくれれば、なんらかの行動を起こすでしょう」

カイルはそこで一旦言葉を区切り、私の肩をしっかりと抱きしめる。

「アリシア、これは嘘だからね！　僕がアリシアとの婚約を破棄するなんてあり得ないことだからね？　絶対に信じないでくれよ？」

「わかったわ。でも、あの、カイル、それでエミリアさんが動かなかったらどうなの？」
カイルの話を聞いて、そう確認せずにはいられなかった。不安な思いが伝わったのか、彼はヒシッと私を抱きしめた。

「これが失敗したら、次は王都の噂通りに、僕がエミリアに近づいて色々聞き出すのが一番いいと思う。でも、僕はそれだけはしたくない。嘘の婚約破棄や不仲ならなんとか！　なんとか！　我慢するけど、僕がアリシア以外に好意を持つ振りだけは絶対にしたくない!!」

「カイル？」

語気を荒らげ、私をギューギュー抱きしめるカイルに困惑していると、パパさんのため息が聞こえた。

「まあ、いいでしょう。アリシアが辛い目に遭うのだと思うと、お父様の胸は張り裂けそうだけれど……アリシアはどうか？ 耐えられそうかい？」

「確かにカイルから婚約破棄されるのは嫌ですわ。でも、今は頑張ります！ なんならエミリアさんが仰おっしゃっていたように、高飛車な令嬢の振りだつてできますわ」

「頼もしいね。しかし、突然婚約破棄だと騒いだら不自然かもしれない。カイル殿下、不仲になるきっかけは必要ですよ」

「そうですね。少し考えてみます」

そうして、私達はパパさんとの通信を終わらせた。

数日後、未だに私達は不仲になるきっかけを掴つかめずにいる。

それに最近、なぜだかエミリアさんが私に近寄ってくれなくなってしまった。

話しかけようと近づくと、彼女の取り巻きの方々がささつと庇かばつてどこかに移動してしまうのだ。

彼女が本当に転生者なのか確認しようにも、こんな調子で上手くいかず、膠着こうちやく状態が続いていた。

そんなことを繰り返し、私はどうしたらエミリアさんと話せるかを考えながら、マスター先生の補習を受けるためにケイトに手を引かれて教室に向かっていた。

マスター先生は魔法学の先生で、パパさんの後輩でもある。パパさんからのお願いで、魔法が使えない私に補習してくれるのだ。

「アリシア嬢」

突然話しかけられて、私は振り向く。

「えっと、その声はアラミック様ですか？」

「はい、その通りです。アラミックです。しかし、凄いですね。少し声をかけただけで私だとわかったんですね」

アラミックさんの感心したような声が聞こえて、頬が少し熱くなる。

彼は隣国からの留学生だ。カイルのお友達でもあり、一緒に執行部を運営している。

少し軽薄な感じはするが、私がチャリティーイベントをした時に的確なアドバイスくれたり、サポートしてくれたりした。とても優秀で優しい人なのだ。

「そ、それが目の見えない私には必要な力ですの。当たり前のことですわ」

「いや、それにしても素晴らしいですよ。ところでアリシア嬢は、どちらに行かれるんですか？」

「えっと魔法学のマクスター先生の補習を受けに行くところですよ。アラミック様は？」

「私ですか……。まあ、散歩……です」

歯切れ悪く答えるアラミックさん。少し元気がないみたいだ。

「そうなの？ でしたら、教室までエスコートしていただけますか？ まだ、教室までの道に慣れていなくて」

にっこり笑ってそう言くと、アラミックさんは「喜んで」と私の手をスツと引いてくれた。一連の動作はとてもスマートで、手慣れているとすら感じる。

確かに初めて会った時も、女性の扱いに慣れている感じがしたわね。

それでも、いつもの少し軽い感じがなく、声も沈んで聞こえたのが気がかりだった。

「アラミック様、お節介せっかいかもしれませんが、なにかありましたの？」

「え？」

「すみません、アラミック様の声に元気がないように聞こえてしまって……。もしなにかお困りでしたら、力になりますわ」

「……では、歩きながら少し話しても構いませんか？」



「はい」

そうして、アラミックさんは母国であるラングランド王国の話を、ぼつぼつと語り始めた。

アラミックさんの国はこの国の北に位置している。

現在、ラングランド王国が、その更に北にあるウオレイク王国から何度も侵攻を受けているらしい。そのため常に戦時体制を取っていて、治安が悪く、教育も遅れている。

現に、つい最近もウオレイク王国との戦いで友人が怪我をしたという連絡があったというので、アラミックさんは心配だと肩を落としていた。

「そうなんですか……。それは心配ですね。隣国はそんなに政情が不安定なのですか？」

「ええ、残念ながらこの国のような学生生活は夢のまた夢です。そのことも、私が祖国の友人達に申し訳ないと感じるころでもあります。王と王太子が宥和政策などと言わずにもっとしっかりしていれば……」

アラミックさんが呟いた低い声に違和感を覚えるが、なにが引つ掛かったのかわからず首を傾げる。しかし、その違和感を振り払って、隣国に思いを馳せた。

すぐ隣の国がそのような状態だなんて……

ラングランド王国に暮らす人々を思うと、胸が締めつけられる。

「お気の毒に……。あの……。一日も早くお友達が回復されることを祈っております」

「ありがとうございます。一つだけ不躰な質問なんです、アリシア嬢はカイルに上を目指してほしくないのですか？」

「上、ですか？」

「はい。私自身、カイルの優秀さに日々驚いています。それこそ王位を目指してもいいのではないかと思うくらい有能です」

「そうなんですね。ありがとうございます」

婚約者を褒められて嬉しくないわけがない。面映ゆさを覚えつつ、私は素直にお礼を言った。

「……しかし、カイルには野心がない。能力も環境も整っているのに、現状に甘んじているように見えてしまうんです。もちろん公爵位が悪いと言うわけではなく……カイルは王子です。王位を目指さなくていいのでしょうか？」

私は彼のあまりに真剣な口調に、思わず立ち止まる。

「アラミック様は、カイルが王位を目指すべきだとお考えですか？」

「そういう道もあると考えます」

「でも、カイルは第五王子ですし、臣下として王太子様をお支えすることを楽しみにし

ていますわ」

「それは、貴女が……。いえ、すみません。今の話は忘れてください。どうも友人からの知らせで混乱しているようです」

そう言って、アラミックさんは私の手を引いてエスコートを再開した。

私も困惑してしまい、しばらくお互いの間に沈黙が落ちた。

「アリシア嬢、マクスター先生の教室に着きました。余計なことを話してしまい申し訳ありません。カイルはアリシア嬢のような優しい心を持つ婚約者がいて、本当に羨ましい限りですよ。話を聞いてくれてありがとうございます」

アラミックさんは、私の手の甲にキスを落とすと、そのまま行ってしまった。手の甲に触れた彼の唇の冷たさが、なぜだか心をざわつかせた。

「おはようございます」

私は気を取り直して教室のドアを開けた。

「アリシア！ 遅かったじゃないか。今、迎えに行こうかと思っていたところなんだよ」

「おはようございます。アリシア嬢」

教室には既にカイルとマクスター先生が待っていた。カイルは私に近寄り、両手を柔

らかく包み込む。

「カイル、ごめんなさい。少し遅れてしまったのね」

なんとなくアラミックさんについては言わない方がいい気がして、遅れたことだけを謝った。きつとアラミックさんも、あんなに気落ちした様子をカイルには知られたくないだろう。

「いや、アリシアが無事なら構わないよ」

「アリシア嬢も来たことですし、早速補習を始めましょう。今日も前回の続きで魔力を外に出して、魔法を発現させる練習をしましょう」

「はい。わかりました」

本当は私一人で補習を受けるはずだったのだけど、カイルにこの件を話したら、一緒に行くと言って聞かなかったのだ。マクスター先生に相談すると、「女性の理想は父親だと言いますしね」と笑って認めてくれた。台詞の意味については、深く聞かないことにした。

「うー、えい！」

「アリシア。そんなに力まないで」

「アリシア嬢！ 何度言ったらわかるんですか!! 魔法は内なる力を使うのです！ 声

の大きさは関係ありません！」

カイルの優しい声と、意外と厳しいマクスター先生の声が教室に響く。

マクスター先生は魔法が絡むと人が変わる。

私のように生活魔法さえ使えない生徒は初めてらしく、どうにかして魔法を発現させようと躍起^{やっき}になっっているみたい。

先生が言うには、私の中に魔力は有り余るほどあるらしい。だが、その魔力は体の中を駆け巡るのみで、ちっとも発現しなかった。

私は、今度は声は出さずに、えいっと気合を入れる。うんとすんとも変化のない状況に、先生もカイルも困っているようだ。

「先生。本当にアリシアは魔法が使えるようになりますか？ 全然使えそうには見えないのですが……」

「おかしいですね。文献によれば、病氣や怪我^{けが}で盲目となった場合は、その後もそのまま魔法を使えるそうですよ。もちろん、生まれつき目が見えないアリシア嬢には、当てはまらないですが……私は成功させたいです」

先生は、絶対私を実験の被験者と見ていると思うたが、声には出さずのため息を吐く。

「アリシアお嬢様。大丈夫でございますか？ 少しお休みさせていただきますましう」

ずっと側で控えていたケイトが、すかさず私の頬に冷たいタオルを当てて、椅子のある方に誘導してくれる。困り果てた私は、ケイトにも魔法について聞いてみた。

いつも息をするように魔法を使っているケイトなら、なにか気付いているかもしれない。

「ねえ、ケイト。貴女はなんだと思う？」

「アリシアお嬢様の魔法が、発現しない理由でございますか？」

「ええ、魔法の概念は理解したし、先生が仰る^{おっしゃる}には魔力もあるようだし、すぐに使えそうなのに。やっぱり目が見えないとダメなのかしら？」

「お嬢様……。私見でよろしいでしょうか？」

落ち込む私を見かねたように、ケイトが話し始める。

「もちろんよ！」

「お嬢様の魔法には、魔法を使いたいという意思しか感じられないのでございます。生活魔法も防御魔法もやりたいことや願いが重要です。例えば防御魔法では自分の身を守るという気持ちが大切なのです」

「気持ち？」

「はい。私は自分に防御魔法をかける時よりも、お嬢様に防御魔法をかける時の方が、遥かに^{はる}気合が入り願ひも強くなります。ですので、私自身の防御魔法よりも、お嬢様に

かけている防御魔法の方が効力が強いはずです」

「そんな！ ケイトも自分自身にきちんと防御魔法をかけてほしいわ」

「わかっておりますが、防御魔法の基本は、守りたいという願いでございます。私は、どうしてもお嬢様をお守りしたい気持ちの方が強くなってしまいます」

ケイトの気持ちが嬉しくて、私は彼女の方に手を伸ばした。

「お嬢様が安全に過ごせますように」

ケイトが私の手を取って、祈るように願いを口にしました。

その途端、私の体に温かいものが流れてきて、ケイトの願いが、防御魔法を発現させたのだと理解する。

私も心の底から、幼い時からずっと一緒にいて、サポートしてくれている彼女の安全を祈った。

「ケイトが危ない目に遭いませんように！」

すると、今までうんともすんとも言わなかった私の魔力が、ケイトを包むようにふわりと発現した。

「『アリシア（嬢）!!』」

「お嬢様！」

カイル、マクスター先生、ケイトがほぼ同時に驚きの声をあげる。

「どうしたんだい？ 今のはアリシアの魔法？ 一体なぜ？」

「なにをしたんですか、アリシア嬢!? これは大変な発見なんです！ 詳しく状況を教えてください！」

バタバタと近くに来て、ワーワーと言ってくるカイルと先生をスルーして、私はもう一度ケイトの手を握^{にぎ}った。

「わかったわ、ケイト。魔法を使いたいとばかり考えていたから、駄目だったのね。誰かを守りたいという気持ちが大切なのね。私に足りなかったのは、魔法の先にある願いだったんだわ」

そう言って、私はケイトに向かって満面の笑みを浮かべる。

「お嬢様……」

ケイトが感極まったというふう^にに声を震わせる。そんな彼女の手を更にきゅつと握^{にぎ}りしめてから、私はカイルの方を振り向いた。

「カイル！ 私やったわ！」

カイルが私の肩を掴^{つか}み、勢いよく抱き寄せた。

「アリシア！ おめでとう！ でも、僕にもわかるように詳しく説明してもらえるか

い？」

「わかったわ。ちょっと待ってね」

私は自分の中のイメージをなんとか言葉にする。

「えっと、今までは魔法を使いたい、発現させたいと思って練習していたの。なんのための魔法なのかについて全く考えていなかったのね。魔法を使うこと自体が私の目的だったの。でも、違うのよ。魔法に必要なのは願いの！」

「そ、それは一体どういうことですか!!」

マクスター先生の興奮した声が、思いの外、近くから聞こえた。

「私のように魔法の発現さえできないと、『魔法を使いたい、なんでできないの?』としか考えられなくなってしまうのです。だって、みんなは普通に使えるんですもの。でも、それでは魔法は使えないのです」

「なんと！ それではなにが必要なのですか!？」

マクスター先生の興奮した声が響く。私は一旦息を吐き出し、落ち着いて話し始める。「大きな違いは『願い』なのです。例えば防衛魔法をかけようとしていた時、私は自分の身を守るということが具体的に想像できていませんでした。それよりも魔法や魔力に気持ちが偏^{かたよ}っていました。魔力を出そう！ 魔法を発現しよう！ としか考えていな

かったんです。スタンプの時と同じです。あれも私はできる限りの魔力を押し付けていただけなのです」

「なるほど。じゃあ、どうして今はできたんだい?」

私はカイルの方に顔を向ける。

「ケイトの安全を祈ったの」

「「え?」」

「私は、心からケイトが危険な目に遭ってほしくないと思ったの。別に魔法なんて発現しなくてもよかったのよ。純粹に、ケイトの安全を祈ったら魔法が発現したみたいなの」とすると、マクスター先生がボンと手を鳴らす。

「そうか！ 魔法を使おうとか、魔力を出そうとかは考えなかったんですね！ アリシア嬢が侍女を純粹に心配することで防衛魔法が発現したと。これは興味深い!!」

先生はそれからブツブツと独り言を繰り返して、ノートになにかを書く音が響く。

「それじゃあ、アリシアは魔法を使おうと思わなかったら使えたということか」

「そうね。もちろん昔から色々な『願い』は抱いていたけれど、魔法の概念と仕組みを理解した上で実行したことがよかったのかもしれないわ。魔力が発現する感覚もわかったの。今なら他の魔法も使えそうよ」

「本当かい？　じゃあ、少し試してみようか？」

「ええ！」

私とカイルは、未だにメモに夢中なマクスター先生を置いて立ち上がり、教室の中央に向かった。

「どんな魔法にする？」

「そうね。前にカイルがやってくれたように体を浮かべてみようかしら？」

私はそう言うとともに自分の体を両手で抱きしめた。

結果を想像して、願うのよ！

前世の時だって病院のベッドの上でいつも考えていたじゃない！　空を飛びたいて！

「体を浮かべるって……あれは難しいんだよ。え？　アリシア!!」

困惑するカイルの横で、魔法が溢れ、自分の体がふわりと浮き上がるのを感じる。

……いえ、感じすぎる!!　浮き上がる体が止まらない！

魔力が出ていくのを止められない！

「キ、キャアアアアアア！」

「アリシアアアアアアア！」

バチンという音と共に、痺れるような感覚が全身を覆った。そして、一気に体から力が抜けて、ストンと宙を落ちていく。

「カイル！　助けてっ」

どうすることもできず、床に叩きつけられるのを覚悟して、体を強張らせる。その時、グイッと強く抱きしめられて落下が止まった。

「アリシア!!　大丈夫かい！　怪我はない？」

カイルの切羽詰まった声が耳に届き、私は彼の首に腕を回して抱きついた。

怖かった……

「カイル……。私、一体……」

「大丈夫ですか！　今のはアリシア嬢ですか？　私の結界にぶつかりましたね！」

「結界？」

「ええ、たまに魔法を暴走させる生徒がいるんです。この教室には四方に私の結界を張っているんですよ」

「では、アリシアは天井の結界にぶつかったということですか？」

「そうみたいです。でも一体どうしてあんな高さまで上がったんですか？　上まで五メートルはありますし、もしかしてカイル殿下がアリシア嬢を浮かばせたんですか？」

「え？ 難しいんですか？」

私はマスター先生の言葉に首を傾げた。

「もちろんです。人を持ち上げるほどの魔力があるのは王族くらいです。それに、持ち上げられる側の魔力も引き出して使わないと、単独で浮かび上がることは不可能に近いのですよ」

「でも、馬はもつと大きいですわ」

馬とは、前世でいうところのオートバイのような魔道具だ。前世で使われていた名前でも、この世界では全く違う道具や生き物であることがまあある。

「魔道具は別です。あれは魔力を増幅して宙に浮かべているので、乗る本人の負担は少ないように作られているんです」

「でも、私は……」

私が話そうとすると、カイルがそれを遮るように私をギュッと抱きしめた。

「アリシア！ そうなんです。僕がアリシアを浮かばせるのを失敗してしまいました。申し訳ありません」

「やっぱり。カイル殿下、気をつけてくださいよ。でも、大丈夫ですか？ あんな高さまで浮かべたら流石に魔力が尽きかけてしまいますよ」

「はい。以後気をつけます。アリシア、君も疲れただろう？ 今日はこれで失礼しよう」

「え、ええ」

「そうですね。わかりました。私もアリシア嬢のことをレポートにまとめたいので、今日はこれで終わりにしましょう」

「はい。ありがとうございます」

カイルはそう言って、私を横抱きにして教室から出た。

「あの、カイル。私は大丈夫よ？」

「ごめん。アリシア、少し話をさせてほしい。いつものガゼボに向かうよ」

私の重さなど感じないかのように、カイルはスタスタと歩き出す。

私は彼のただならぬ様子に黙っていることしかできなかった。

「着いたよ」

カイルの声と共に、私は、ガゼボの中にあるいつものベンチにゆっくりと座らされた。

「カイル、さっきはどうしたの？」

私は待ちきれずにカイルを問いただす。

「アリシア、僕もまだ混乱しているけど、状況を確認させてもらおうよ」

「ええ」

「君は君自身の魔法で自分の体を浮かべた。合ってる？」

「ええ」

「途中で制御不能となってそのまま浮かぶことを止められなかった。で、マクスター先生の結界にぶつかって落ちた。そうだね？」

「そうね。そうなるわ」

カイルが隣で黙り込んでしまう。

「カイル？ どうしたの？ なにか問題があるの？」

私はまた常識外のことをしてしまったのかと、ドキドキしながらカイルの返事を待つ。

「アリシア……。さっき先生も言っていたけれど、普通は飛べないんだ」

「先生もそう言っていたわね。でも、どうして？」

「自分を持ち上げるほどの魔力を持っている人間なんて、聞いたことがない」

「けど、カイルは私を浮かばせてくれたわ」

「あれだって凄く難しいんだよ。アリシアが望んだから、僕は自分ができる精一杯の魔法を使っただ。だって、君に初披露する魔法なんだよ。それだって、自分の魔力じゃなくてアリシアの魔力も使わせてもらっているよ」

「そんな……」

「いくら魔法が暴走したとしても、自分だけの魔力であんなに飛べるなんて……。凄いなんだけど、まずい……」

「どうして？」

「今回、マクスター先生は見えていなかったから、僕の魔力が暴走したことにしたけれど……王族でもない君が僕以上の魔力を持っているとわかったら、良くて研究材料、悪くて魔法研究所に連れていかれて実験対象だよ」

「そんな……」

カイルから知らされる衝撃の事実には、絶句する。

「それくらい珍しいことなんだ。もしアリシアが自分の意思で魔法を制御できないとしたら、これからも今まで通り魔法は使えない、もしくは君が侍女にかけた程度のことしかできないということにした方がいい」

カイルの真剣な声に頷きながら、私もよく考えてみる。

確かに簡単に人が飛べるなら、みんな飛んで移動するわよね。でも、誰も飛ばないし、馬車や馬で移動している。それは飛べるほどの魔力は誰も持っていないから？

私は、今になってようやく、自分がとんでもない存在なのだと理解した。

「わかったわ……。もう、むやみに魔法は使わないようにするわ」

「ああ、そうしてほしい。君の侍女にも伝えておいて。これは僕達だけの秘密だよ」

「ええ、いつもありがとう。カイル」

「いいんだ。でも、君といると本当にいつもハラハラしている気がするよ。大人しくしているんだよ。僕のお転婆姫」

苦笑をこぼしたカイルは、私の額にそっとキスを落とす。そのキスからカイルの心配する気持ちが伝わって、なんとも言えない気持ちになる。

「カイル、心配ばかりかけてごめんね」

私が少し俯うつむいて呟くと、カイルがしっかりと私を抱きしめた。

「前にも言ったけど、君がどんな存在でも僕は今のアリシアが好きなんだ。絶対に守るよ」カイルの気持ちに胸が熱くなる。私は彼の背に腕を回して、不安な気持ちを吹き飛ばすように抱きついた。

♪・♪ ♣ カイルの気持ち ♣ ・♪

カイルは腕の中に収まるアリシアの不安を感じ取って、内心の動揺をなんとか覆おほい

隠す。

カイルは混乱していた。

先日、今まで自分はエミリアに上手く丸め込まれていたんだと自覚した時よりも、アリシアが転生者だと告白してくれた時よりも、今、動揺していた。

それでも、アリシアが転生の話をしてくれた時、どんなに突拍子がなくとも、彼女のことを信じると決めたのだ。

そう伝えた時のアリシアの笑顔は、今まで見た中で一番嬉しそうだった。しかし、神様はいつもアリシアに意地悪をしているように感じる。

転生者であることはまだいいが、この世界で盲目とはあまりに可哀想だ。

前世で、目が見えていたことを覚えていて、それを赤ん坊の頃から抱えていたなんて……自分なら絶対に耐えられない。

あの時、カイルの方が泣きそうな顔をしていたはずだ。

それなのに今度は、信じられないくらいの魔力量だ。アリシアにもその危険性は伝えたが、これは本当にまずい。

アリシアが浮かび上がった時に、マクスター先生がメモに夢中で本当によかった。もし見られていたらと思うと体が震える。それくらい危険なものなのだ。

当面は今まで通り魔法は使えないとしておいて、その間に制御できるように練習するしかない。制御の効かない膨大な魔力は、人を不安にさせるし、恐怖を与える。けれど、カイルはこれからアリシアと不仲になる予定なのだ。

不安しかない。万が一にも誰かに魔力暴走を見られたら、それだけで本当に人から恐れられ、嫌われる要因になってしまう。

「カイル？」

腕の中でアリシアの瞳が不安そうに揺れる。

この美しく、優しく、強い婚約者を心から愛しているのだ。

カイルは、彼女の頬に小さくキスを落とし、必ず彼女を守ると決意を新たにしていたのだ。

第二章 魔力暴走

・・◆アリシアと襲撃事件◆・・

私の魔力についてはパパさんにも秘密にすることとなり、私は今まで通り魔法が使えない令嬢として行動していた。マクスター先生にも魔法はあの一回しか使えなかったと報告し、先生がレポートを書き上げるまで、私の補習は一旦保留となった。

但し、誰にも見つからないようにカイルと魔力を制御する練習を新たに始めることにした。

そんな忙しい毎日の中、まだエミリアさんと話すこともできずにいる。

「お嬢様、もうお休みのお時間です」

「ありがとう、ケイト。あの、明日なんだけど、エミリアさんと二人で話す時間は取れるかしら？」

「お二人で……ですか？」

「ええ、どうしても話したいことがあるの」

「わかりました。エミリア様のご予定を確認して参ります」

「よろしくね」

すると、ケイトがさっと手を取って、ベッドまで連れていってくれた。

私は横になりながら、これからのことに思いを巡らせる。まずは、明日エミリアさんと話して転生者なのかを確認しよう。

でも、どう話したら良いのかしら？

突然前世の話なんてしたら、また変な噂が立ってしまうわよね。

「うーん」

それに、カイルの婚約破棄計画が実行されたら、もつと難しくなる。王子が婚約破棄を考えている者など、誰も相手にするはずがない。その前になんとかしてエミリアさんと話したい。

カイルに相談できるうちに、なんとかしてエミリアさんが転生者であるという確証を得たい。

もし、お互いに転生者だとハッキリしたら、エミリアさんはなにもしてこなくなるかも私は発明には興味ないし、彼女の手柄を横取りするような真似もしないと約束したら安心してくれるだろう。逆に前世のことを話せたら、また仲良くなれるかもしれないわ。それでも、エミリアさんがなにかしてきたらどうしよう。

転生者ではなかったら？ ただ単に私が嫌いだけだったら？

「はあ、考えることが一杯ね」

まだ、いつ、どんなきつかけでカイルと不仲になるのかは決まっていらないが、それはきつと近いうちに実行されてしまう。

不安を覚えて、ベッドのカバーを握りしめたその時、寢室のドアが叩かれた。

「ケイト？」

「お嬢様、急ぎのご連絡でございます」

「え？ 誰から？」

ドアの向こうでケイトの声が響く。

「カイル殿下から通信が入っております。急用ということですが、いかがいたしましたしょう？」

私は上半身を起き上がらせ、ケイトに通信機を持つてくるよう伝えた。

「カイル？」

通信機に向かって話しかけると、向こうからカイルの焦った声が聞こえてきた。

「アリシア！ 夜遅くにすまない。少し話してもいいだろうか？」

「ええ、大丈夫よ。なにかあったの？」

「ああ、今ここにカーライルが来ているんだ」

「カーライル様？」

カーライルさんは、アラカニール公爵の嫡男で、私の従兄でもある。彼はカイルの友人で、一緒に王太子様を支えていく同志でもあるが、こんな夜更けに人を訪ねるような

人には思えない。

不思議に思っ、私は首を傾げた。

「こんばんは、従妹姫。夜遅くにごめん」

「いえ、でも、一体どうしたのですか？」

「コホン、まずこんな遅くに訪ねたことを詫^わびさせてほしい。実は二人がエリック達に色々依頼しているのは聞いていて、私もできる範囲で周りを観察していたんだ。カイルやエリックは最近忙しそうにしていたから、私は執行部でのエミリアをそれとなく観察していたんだよ」

「そうだったのですね。ありがとうございます、カーライル様」

「それで、最近ちょつと気になることがあってね」

「まあ、なにか？」

「エミリアとアラミックなんだが、二人でいることが増えたんだよ。まあ、アラミックは女生徒とも気安く話すタイプではあるけど、誰か特定の女性と一緒にいることはあまりなかったんだ。だから余計に気になってね」

「エミリアさんとアラミック様……ですの……」

ふと、先日、アラミックさんと話した時のことを思い出した。確かにあの時、彼の様

子はおかしかった。

「あの、実は先日アラミック様に偶然お会いして少しお話ししたの。お友達^{けが}が怪我をしたと言っていたから、お慰^{なぐさ}めしたわ。ただ、その時少し気になることを言っていたの」

「どんな？」

「カイルはなぜ王位を目指さないのかとか、能力があるのにもつたいないとか……」

「なんだってそんなことを？」

カイルが驚きの声をあげた。その後、カーライルさんが神妙^{しんみょう}に呟く。

「なるほど、アリシア嬢にもそんなことを……。実は私にも同じようなことを尋ねてきたんだ。ただ、言い方はもっと嫌な感じだったけどね」

「嫌な感じ？」

「言にくいけど、カイルが王位を目指さないのはアリシア嬢がいるからなのかと……」

「なっ！ どうしてそんなことに！」

カイルが声を荒らげる。そんな彼を宥^{なだ}めるように、カーライルさんが続けた。

「もちろんきちんと否定したよ。カイルは第五王子だし、王太子様は優秀な方だから、私とカイルは臣下として支えることを楽しみにしていると。ただ、納得してはなさそうだった」

三人とも黙り込んでしまった。

アラミックさんの意図はなんだろう？ エミリアさんとの関係は？

グルグル考え込んでいると、カーライルさんが口を開いた。

「それで、さっき談話室の前を通りかかったら、二人の会話が聞こえたんだ。明日は大丈夫なのか？ もう止められないとかなんとか……」

「明日？」

私とカイルは同時に呟いた。

「だから明日は二人とも大人しくしてほしい。あと、エリックにも話して護衛を強化してもらった方がいいね。ちよつとエリックを呼んでくるよ」

そう言つて、カーライルさんはエリックさんのところに協力を頼みに行った。

「アリシア、大丈夫かい？」

私がボーッとしていると、カイルが心配そうに話しかけてきた。

「ええ、大丈夫よ。ねえ、カイル。アラミック様は本当にただの貴族なのかしら？ 普通は自国の王様や王太子様には敬意を払うものでしょう？ この前アラミック様がお二人を非難するようなことを仰つていたの……」

「……そうか。彼が側近候補になった時に父上に確認したが、問題はなかったよ。でも、

もう一度確認してみよう」

「ありがとう」

「いや、君の勘は侮れないからね」

すると、通信の向こうからカーライルさんとエリックさんの話し声が聞こえてきた。

二人一緒に戻ってきたらしい。

「エリック、カーライルから聞いてくれたか？」

「ああ、それは聞いたが俺はお前の護衛も兼ねてこの学校にいるんだ。あまり勝手に動くなよ！」

カイルの声に続いて、エリックさんのちよつと怒った声が聞こえた。

「ああ、わかつてる」

「とにかく警備体制も見直したいから、明日は俺の側を離れないようにしてくれ。部屋に閉じこもるのもいいと思う」

エリックさんの言葉に私は思わず声をかける。

「エリック様、私は大丈夫ですわ」

「えっと……アリシア嬢？ 通信か？」

「ええ、そうです。エリック様、エミリアさんがなにかを企んでいるのなら、それはチャ

ンスですわ。エミリアさんの次の一手がすぐにわかるということでしょう？ ターゲットの私達が部屋から出なかったら、なにも起こらないかもしれない」

「それはそうだけど、僕は心配だよ！」

「アリシア嬢、確かにチャンスではあるけれど、部屋から出ない方が絶対に安全だよ」カイルが大きな声で私の言葉を遮った。カールさんにも心配げに話す。

「でも、みなさんもエミリアさんのことが気になっているのでしょうか？」

「アリシア嬢、だが……」

エリックさんが更になにかを言おうとしたところを、カイルがため息を吐いて止めた。

「エリック、こうなったらアリシアは止められないんだ。きっと部屋にいろと言っても一人で出歩いてしまう」

「なっ！ やっぱアリシア嬢は……なんというか……勇気がある……かな……」

「無謀とも言うけどね」

エリックさんの呆れ声に続いて、カールさんの少し怒った声が聞こえてきた。

私はしょぼんとして、小さな声で「ごめんなさい」と呟いた。見かねたカイルが、「しょうがないな」と囁いてから、エリックさんとカールさんに話す。

「ありがとう、二人とも。でも、アリシアの提案もありかと思うんだ。確かにこんなに

早く動いてくれたら御の字だ」

「でも、狂言とはいえアリシア嬢との婚約を破棄する作戦もあるんだろう？」

「ああ、それくらいしかエミリアを誘き出せそうにないと思っていた。でも、明日、エミリアがなにかを仕出してくれたらその必要もなくなる」

「そうは言っても難しいよ。エミリアは今までも尻尾を出してないし……アラミックがどういうつもりなのか見当もつかない」

「明日なにも起こらなかったら、やはり不仲作戦を実行するしかないな。でも、まだ、みんなが納得するきっかけが掴めないんだ」

カイル達三人は既に明日以降のことについて考え始めた。

次から次へとアイデアや意見が飛び交い、彼等が本当に信頼し合っているのだと感じる。

「しかし、婚約を破棄するくらいで尻尾を出すかな？」

カールさんがポツリと呟いた。

その不安を振り払うようにカイルの明るい声がその場をまとめる。

「それは僕も不安ではある。しかし、ただ待っているだけじゃしょうがないだろう。それより本当にアラミックはこの件に関わっていると思うか？」